

# 夜のキリン

しゅう史奈

## ☆ 登場人物

美咲

匡まなし 〈美咲の弟〉

敏也 〈美咲の恋人〉

高子 〈美咲たちの従姉妹〉

律 〈美咲たちの従姉妹。高子の妹〉

恒吉 〈美咲の友人、おかま〉

直人 〈あたりや〉

菜未 〈直人の幼なじみ〉

和恵 〈敏也の妻〉

孝弘 〈和恵の弟〉

## ☆ 時

ある年の九月から十一月

## ☆ 場所

神戸。須磨海岸の近くにある喫茶 「きりん」

## プロローグ

一人の女。高子登場。語りかける。

高子 お手紙うけとりました。どうしてここがわかったのでしょうか。まさか

母が？そんなはずはありませんね。あなたの異常な行動に気付いてまっ  
さきに警察に訴えようと言いだしたのは母ですから。ではどうして？

考えるのはよします。あなたのことだからどんな手を使ってでも私たち  
ころにみつけれられてしまうんですね、きっと。「許してくれるまで決して  
追いかけていったりはしない」・・・本当ですか？「その代わりその街  
の様子やあなたの生活を教えて欲しい。」あなたがこんなにきれいな字  
を書くなんて、初めて知りました。だから、とはいいませんがこのお手

紙から伝わってくる優しさにめんどじてあなたの言葉を信じてみようと思います。だからといって調子にのってはいけませんよ。あなたは私に触れることはもちろん近づくことさえ禁止されているんです。もし今度そんなことがあったらただちに逮捕されるんですよ。一体どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。一度は好きになった人なのに。でも考えるのはやめます。考えたり悩んだりするよりぼんやり海でも見ている方が今の私にはいいそうです。海が好きだったのは随分昔のことです。妹と二人この海の街に預けられていたのはもう十年も前の事なんです。逃げてきました。この街へ。でも何故でしょう。今の私には海が違ってみえるんです。灰色の海・・・いつか遠い昔にそんな絵を見た事があります。そうあれば・・・。

暗転。波の音。

## 一場

九月。須磨海岸近くの喫茶店 「きりん」。

舞台下手奥にカウンター、レジ、客席からは見えない奥が厨房になっていてその先に裏口があるという設定。その他に二人用のテーブル席が二つ、中央あたりに丸いやや大きめのテーブルがあってそこには椅子が三つ程置かれている、丸テーブルの上には観葉植物がちよこんと置いてある。

舞台上手前が入口で海辺らしいガラス製のランプが飾られていたり、古めかしいステンドグラスを施した玄関だったりする。

そう、天井から吊されたチューリップ型のオレンジの照明といい、座席の赤いビロードといい、何となくレトロなムード（といえれば聞こえはいいのだが）の店なのである。上手奥には階段。二階が住居になっている。舞台前面はガラス窓になっているという設定。

深夜。匡、裏口から登場しレジに向かう。音をたてないように中の札を掴んでポケットへ。

匡　くそ暑いな（退場）

美咲の声　誰？ まあちゃん？

美咲二階より登場。

美咲　まあちゃん？

暗闇の中をレジを確かめに・・・。

美咲　（そしてあの音）え？（耳を澄ます）

敏也登場。はじめは声だけで、

敏也　そこか。

美咲　まあちゃん？

敏也　僕だよ。

美咲　あ・・・。

敏也　どしたの？

美咲　ごめん、おこした？

敏也　いいけど。

美咲　すぐ上がるから。

敏也　（階段をおりながら）何かあったの？

美咲　暗いから気をつけて。（と電気をつけようと、）

敏也　いいよいいよ大丈夫。（その手を止めて）

美咲　・・・。

敏也　この方が落ち着く。

美咲　うん。

敏也　匡くん？

美咲　え？

敏也　まあちゃんってさっき。

美咲　（クビをふって）今日は帰ってきいひんわどうせ。

敏也　嫌われてるからな。

美咲　あれでも気をきかしてるつもりやねんよ。

敏也　そうとはしらなかった。

美咲 ……なんか音がしたような気がして。  
いやがらせ？

美咲 あれ以来毎晩一回は目がさめてしまうねん。  
敏也 気にすぎなんじゃないか。

美咲 こないだはガラス割られた位で済んだから良かったけど次に何される  
か思たら…。

敏也 やっぱり警察に届けた方がいいよ。

美咲 被害届は出したけど、用心棒になつてくれるわけでもないし。なんか  
おこるまで助けてくれへんねんもん、警察なんか頼りにならへんわ。

敏也 だからって一人でここで見張ってて何かあったらそれこそあぶないよ。  
美咲 いつもは匡がいるから。この頃あの子に一階で寝てもらってるねん。

敏也 ……じゃあ今日は僕のことおこせばよかったのに。

美咲 よう寝とったから。

敏也 ここに来たらいつもよりよく寝られるんだよ。安心するからかな？

美咲 寝言ゆうてたよ。

敏也 なんて？

美咲 女の人の名前呼んでた。

敏也 うそ。

美咲 うそ。

敏也 ……。

美咲 なんもそんなに動揺することないやろ。

敏也 いや…。

美咲 なんか飲む？

敏也 いいよ。

美咲 そう。(自分のために飲み物をとりに行く)

敏也 来月はもっと長くいられると思うから。もしお店の方が大丈夫だった  
らどこか旅行にでも行くこうか。

美咲 (黙って飲んでる)

敏也 金沢だっけ？行きたいって言ったの。

美咲 ……。

敏也 聞ってる？

美咲 うん。

敏也 やっぱりお店があるから無理かな。

美咲 ほとんど開店休業やもん。

敏也 ……

美咲 一緒にがんばろうってゆうてたお店もほとんど立ち退いて、今は角の  
恒ちゃんところうちだけ。

敏也 ……

美咲 恒ちゃんところはゲームやからもっと大変らしいねん。昼間からやぐざ  
みたいな人がずっとねばって、他のお客さん恐がってだあれも来えへん  
ようになってしもたって。

敏也 ここにも来るの？

美咲 うちの場合は新しくできたあの大きいなんとかコテージにお客さんと  
られただけ。

敏也 シーサイドコテージ。

美咲 なあ、コテージってどういう意味なん？

敏也 山小屋だろたしか。

美咲 海のそばの山小屋？どういう意味？

敏也 どういう意味って。

美咲 だって変やん。

敏也 ああ。

美咲 なんで海のそばに山小屋があるんよ。海のそばやったら海小屋やろ。

敏也 まあなんとなく聞こえがいいからだろ、シーサイドコテージってい  
え

美咲 あほらし。この店買いとったら今度はどうせ海のそばの豚小屋とか馬

小屋とかつくるんやわ・・・なによ？！

敏也 なにが？

美咲 笑うことないやろ。

敏也 笑ってないよ。

美咲 海小屋の肩持って。

敏也 持ってないよ。

美咲 同じことやわ。

敏也 でもそう考えると「きりん」ってのも変わってるよな。

美咲 ？

敏也 彼の店はやっぱりあれだもんな。その海系っていうか「ブルーノート」

「シーサイドメモリー」「シーパラダイス」

美咲 ほしたら何？きりんは動物園のそばでしか通用せえへんとも言うん？

敏也 どうかな、けどなんかそれだといかにもでかえって変かもな。

美咲 きりんのどこが悪いんよ！

敏也 悪いなんて言ってないよ。

美咲 きりんにはねえ、一角獣てゆう意味もあるんやから。中国の偉い人がでてきて大切な事をしはった時に登場する神様とお友達の動物やねんから。

敏也 泣くことないだろ。

美咲 泣いてへん。

敏也 ……（ひき寄せる）。

美咲 もう一日泊まって。

敏也 ……。

美咲 うそうそ。

敏也 ……。

美咲 すぐ動揺する。

敏也 もう親戚の方に明日行くっていっちゃったから。

美咲 いいねんわかってるから。言うてみただけ。

敏也 しかしおふくろもわがままでよなあ。死んでまで迷惑かけるんだから。

美咲 たいした迷惑と違うやないの。

敏也 たいした迷惑だよ。何十年も昔に離婚してんだぜ。今更そこんちのお

墓に入りたいてって言ったってさあ。

美咲 私も死んだら敏也と同じお墓に入りたい。

敏也 ……。

美咲 死んでしまう何十年も前にお別れしてても、同じお墓に入りたいって

遺言するもん。

敏也 別れるなんて言うなよ。

美咲 学生結婚するなんてよっぽど好きやったんでしょ？

敏也 またその話。

美咲 そやのに結婚して一年もせんうちにこんなお姉さんと恋に落ちたんや

もん。敏也の言う事なんか信じられへんわ。

敏也 お姉さんなんて思ってないよ。

美咲 真面目そうな顔して・・・初めて会った時まだ学生さんかと思っただわ。

敏也 美咲こそ学生アルバイトに見えたよ。

美咲 三年前か・・・。

敏也 おふくろもいなくなったしもうちよつとの辛抱だから。話し合いは進んでるんだ。

美咲 よっぽど好きやったんやね、お母さんお父さんのこと。

敏也 ……けんかばかりして別れたくせにな。

美咲 けどお父さんお一人やったんでしょ、ずっと。

敏也 誰からも相手にされないよあの性格は。

美咲 絶対に入れてあげて同じお墓に。

敏也 佐山家の墓ってさあ舞子のすごい高台にあるんだよ。

美咲 前にも言うてたね。

敏也 うん眺めがほんとはよくてね、淡路島まではっきり見渡せるんだよ。

美咲 へえ。

敏也 おふくろがおやじと結婚して一番嬉しかったのがその墓に入れることだったってさ。

美咲 まさか。

敏也 ほんとほんと。

美咲 (飲んでる)

敏也 酒そんなに強かったっけ？

美咲 よう寝られるから。

敏也 そうか。

物音。

敏也 誰だ？！

律、登場。

美咲 りっちゃん？どないしたんこんな時間に。

律 ……。

美咲 (敏也に) りっちゃん、従姉妹の。

律 こんばんは。

敏也 ああこんばんは。

律、すたすたとそのまま二階へ。

美咲 どこ行っとったん？

律 別に。

美咲 この頃物騒やねんから夜は気をつけなあかんよ。

律、答えるでもなく二階へ。

敏也 例の？

美咲 そう妹の方。変わった子やねん。

敏也 いくつ？

美咲 もうすぐ二十五かな。

敏也 へえ。いつ来たの？

美咲 三日前かな、着いたん。

敏也 昼間みかけなかったね。

美咲 あの子いっつも知らん間にでていって何してるんかいつこもわからへん。

敏也 具合悪いのお姉さんの方なんでしょ？

美咲 そう、あの子たかちゃんの世話役なんか言うてほんまは何しに来たんやろ。

敏也 それで具合はどうなの？

美咲 たかちゃん？

敏也 うん。

美咲 まあまだうまいこと人としやべったりできへんけど落ち着いてはいるみたい。

敏也 そう。よっぽどいやな目にあっただろうな。

美咲 男の人につきまとわれてどうのこうのなんてテレビだけの話かと思て

たわ。

敏也 土地の立ち退き問題でやくぎに脅される事だっつまさか自分におこるとは思ってたかっただろ。

美咲 奥さんのいる年下の男の人と付き合ってる自分なんか想像もできへんかったしね。

敏也 . . .

美咲 ほらまた動揺する。

敏也 旅行行こうな。

美咲 . . .カエルの話知っとう？

敏也 カエル？

美咲 雨が降るとカエルがゲロゲロ啼くのはなんででしょう？

敏也 なんだよ急に。

美咲 いいから。

敏也 それって 「風が吹くとおけやが儲かる」みたいな？

美咲 子供がねいっぱいいるカエルのお母さんの話。子ガエル達はわがまま

でいつも全然お母さんのゆう事をきかへんかってん。それどころか反対の事ばかりする。右むけゆうたら左むくし、ゆっくり歩きなさいってゆうたら走って大騒ぎする。それでどうとうそのお母さんガエルが死ぬときにね . . .

敏也 酔ってるの？

美咲 酔ってへんよ、なんで？

敏也 今日はおしゃべりだなあ。

美咲 ちゃんと聞いてよ。とうとう最後という時に子供達がお母さんに聞くねん。「お母さん死んだらどこに埋めてほしい？」その時お母さんガエルは考えました。「この子達は私が頼んだ事の反対ばかりする。だから反対のことを言えばきくと望みがかなうだろう。」それで子ガエル達には「川の近くに埋めておくれ」と言っておきました。本当は見晴らしのよい山に埋めて欲しいなと思っていたんです。お母さんの死んだあと子ガエル達は相談しました。「僕達はいつもお母さんの言う事に反抗ばかりしてきた。最後の願い位きちんとしてあげよう。」というわけで母ガエルは結局じめじめした川の近くに埋められてしまいました。

敏也 それでどうして雨の日がでてくるんだよ。

美咲 雨がふると川があふれるでしょう。  
敏也 ん。

美咲 川があふれるとお母さんのお墓が心配でしょう。  
敏也 まあね。

美咲 だからゲロゲロゲロ。  
敏也 もう上がるうよ。

美咲 ゲロゲロ。  
敏也 酔っぱらい。

美咲 願い通りにしてあげてね。  
敏也 うちのお袋をカエルと一緒にするなよ。

美咲 ゲロゲロ。  
敏也 それに俺はいい息子だったよおふくろにとっては。

美咲 私のおかあちゃんはあの海にいてる。  
敏也 海？

美咲 ここのお母さんが朝早くに海岸で赤ちゃんをみつけて育ててくれた、  
敏也 それが私。

敏也 . . .  
美咲 は やっぱり酔っぱらったのかな初めて人に話してしもた。

敏也 ほんと。  
美咲 ずーっと大人になってお父さんがなくなる時教えてもらった。

敏也 . . .  
美咲 美咲は海で生まれたんやって。

敏也 . . .  
美咲 でも実感なんかなかった。うそみたいでずーっと。

敏也 なんてこんなこといいだしたんかな（敏也に抱きつく）。  
敏也 上がるうよ . . .

美咲 先に寝てて。  
敏也 まだ起きてるのか。

美咲 . . .  
敏也 明日帰るんだよ。

美咲 帰る帰る、カエルゲロゲロ。  
敏也 . . . .（二階へ退場）

美咲 （見送ってそして海をみつめている）・・・

突然電話の音。美咲立ちすくむ。出ないでみつめている。  
やがて静寂。

美咲 ……（そしてまた、あの音が）えっ（耳を澄ます）

## 二場

翌日。店番をしているらしい律。ぼんやり客席に座っている高子。  
律はスケッチに色をぬっている。かたわらにクレパス。  
たった一人のお客、ゲーム屋の恒吉。律なにやら鼻歌。

恒吉 ちょっと。

律 ……。

恒吉 ちょっとってば。

律 ……。

恒吉 ちょっとあんだ！

律 なに？

恒吉 なにって…。

律 呼んだんじゃないんだ。

恒吉 呼んだよ！呼んだにきまつてるやろ。

律 だからなに？

恒吉 いままで待たすんよ。

律 ？

恒吉 コーヒー。

律 ああもうちょっと。

恒吉 もう二十分もたってるやないの。

律 豆探してたから。

恒吉 それはしゃあないけどなんかあるやろ。お急ぎのところ申し訳ありません、とか少々お待ち下さいとか。

律 ちようちようお待ち下さい。どうせヒマなんでしょ？

恒吉 ヒマなわけないやろ。仕事中にわざわざきたっとうのに。

律 客こないんでしょ、こわがって。

恒吉

．．．。

律 やくざ、おどかされてんでしょ？

恒吉

．．．。

律 ま、ここも同じだけどね。

恒吉

．．．。（そわそわと窓の外を見ている。）

律

何気にしてんの？

恒吉

あんたに関係ないやろ。

律

もしかして待ち合わせ？

恒吉

おそいなあ、美咲。

律

お別れのチュウでもしてるんでしょ。♪はじめてのチュウきみとチュ

ウ

恒吉

．．．ようあんたみたいなんに店番たのむわ美咲も。

律

まどうせつぶれかけの店だからね（歌い続ける）。

恒吉

．音痴。

律

なんか言った？

恒吉

別に。

律

．．おかま。

恒吉

何か言った？

律

別に。

恒吉

．．ちび。

律

ぶず。

恒吉

なによ！栄養失調のがきみたいに目だけ光らせて。

律

うるさい！マッチョのおかま。

恒吉

．．ほんまかわいえないなあ律は。あんたが高ちゃんと、この家にや

つかいになってた時あれだけ可愛がったげなのに。

律

過去は過去、今は今。

恒吉

なあ高ちゃん。

高子

．．．。

恒吉

話しかけてもええんやろ？

律

ご自由に。

恒吉

あんたは律と違って前から優しい子やったのになあ。

高子 . . . .

恒吉 僕のこと覚えてるやろ？

律 おかまのつねきち。

恒吉 つねよし。高ちゃんなあ何でもよう出来て、私がなんやかんやいじめられてる時よう助けてくれたなあ。

高子 . . . .

律 なに？高ちゃん。ああそれ以上近づくと菌がうつるから離れて欲しい、はいはい。と言う事だから。

恒吉 ちよつと律！

高子、静かに立ち上がり二階へ。

電車の音。

恒吉 . . . .

律 ほらね。

恒吉 なんであんなええ子やった高ちゃんが病気になって、行いの悪い妹の方へびんぴんしてるんやろ。

律 世の中なんてそういうもんよ。

恒吉 ま、ストーカーにも好いてもらわれへんわこの性格は。

律 あんたに言われたくないね。いらっしやませ。

孝弘、登場。

孝弘 ここ、きりん？

恒吉 はいそうですけど。

孝弘 そうじゃあ（恒吉を通過して視線を律に）きみがこの店の主人？

恒吉 まさか。

律 そう。

恒吉 ちよつと。

孝弘 随分若いね。

律 客じゃないの？

孝弘 想像と全然ちがうな。もっといかした人かと思った。

律 文句ある？

孝弘 客だよ客。ちよつと待ってて（出ていく）。

恒吉 . . . . .

律 美咲もこれぐらいやればおどされたりしないんだ。なよなよしてつからだよ。

恒吉 あんたはそれしかできへんのやる。

女、和恵が入ってくる。

律 （人が変わったように）いらっしやいませ（と案内。水などもっていく）。

恒吉 . . . . .

律 （恒吉に）モノホンの女をなめんなよ。

和恵 あコーヒー、ホット。

律 かしこまりました。

和恵、大きいしゃっくり。

恒吉 . . . . .

律、即座にコーヒーを入れてです。

律 どうぞ。

恒吉 ちよつと（私のコーヒーは・？） . . . . .

和恵 ありがとう。海岸へは（しゃっくり） . . . . .

律 ああ、ここを出て左手にずっと行って道路渡ったらすぐ見えますから。近くまで行けばすぐわかります。

和恵 どうも。関西弁じゃないのね。

律 え？

和恵 ごめんなさい。今朝新幹線で来たんですけど駅員さんからバスのアナウンスから全部関西弁で。

恒吉 そら関西やもん。

和恵 そうですよ。なんかでもテレビの世界に来たみたいで。

孝弘登場。

孝弘 なんだよ、探しちゃったよ。待ってるって言ったくせに。

和恵 ごめん、知らない間に入ってきちゃった。

孝弘 (律の方をみて) 話した？

和恵 話すことなんかないわ。

孝弘 なに言ってるんだよ。

律 あの、

孝弘 ああコーヒー。

律、またすぐに運んでいく。抗議している恒吉を意図的に無視。

孝弘 まさかこれでもう満足なんていうんじゃないよね。

和恵 そうなのかも。

孝弘 俺学校休んで来たんだよ。

和恵 ごめん。

孝弘 連絡は？

和恵 まだない。

孝弘 ここにいるんじゃないの(と見渡す)。

和恵 親戚んちに行ってるはずだから。

孝弘 電話した？

和恵 まだ。

孝弘 確かめるよ。

和恵 (しゃっくり)・・・い。ちそうさま)とお金を置いて律に) ありがとう(出ていく)。

孝弘 待てよ、こんな栄養失調のがきみたいのに負けんのかよ(と追いかけていく)。

顔を見合わせる律と恒吉。恒吉ちよっと得意になっている。

律 はい（と和恵の飲まないまま置いていったコーヒを）。  
恒吉 なによこれ？  
律 飲みたいんでしょ、コーヒー。  
恒吉 ばかにしてんの。  
律 口つけてないって。  
恒吉 そう言う問題と違うやろ。  
律 猫舌って言ってたし。  
恒吉 そうそう私は猫舌で・・・あほ！誰が飲むんよこんなん。  
律 引っも払ってないんでしょけち。  
恒吉 払ってるよまとめて。  
律 美咲と違って私はお客さんとただのひまつぶしくらい見分けられるからね。  
恒吉 ひまつぶしとはなによこのちんくしゃ！  
律 ちんくしゃ？！

その時、裏口から匡登場。

遊び人風というよりちぐはぐな印象を与える格好。サングラス。

恒吉 匡あんた・・・  
匡 おうこれ（鍵を渡す）。  
恒吉 これってあんた店は？  
匡 閉めてきたでちゃんと。  
恒吉 閉めてって、まだお昼過ぎやないの。  
匡 （客用の水差しから水をついでごくごく飲んでいる。）朝から四時間できたんは小学生のガキが一人と猫が一匹だけや。  
恒吉 これからやねんて、忙しなるん。  
匡 店番して欲しかったらクレーナーなおせよ、やくざも逃げるであれは。  
恒吉 もう九月やねんから。用心棒ぐらいは出来るか思たのになんの役にもたたへんわ。なにがもとボクサーや。  
匡 用心棒なんかいらんやろ、自分の方がよっぽど強そうやんか。  
律 確かに。  
恒吉 なにゆうんよ、か弱い私をつかまえて。

匡 へえへえ。

恒吉 バイト料一日分六千円はろたやろ、半分返して。

匡 せこ。

恒吉 あたりまえやろ。うちかて今大変なんやから。

匡 はやいとこあんな店うっぱらって金もろた方がええんとちゃうんか。

恒吉 美咲の弟とは思えへんわ。死んだお父さんが聞きはったら泣くよ。

匡 死んだ奴は死んだ奴や。過去は過去、今は今。

恒吉 親不孝者。

匡 あ、猫出してくるん忘れた。今頃店の中であばれとんちゃうか。

恒吉 え？もうどないしてくれるんよ。

匡 はよ見てこいよ。だいたい人に店頼んで自分は何しとうねん。

律 彼氏を待ってるの！

匡 え？直人また病院ちゃうんか？

恒吉 水曜の午後によく抜けてくるんよ。

匡 ナオは真正銘のノーマルやで。

恒吉 あんたに関係ないやろ。会うだけでええねんから。

匡 けど猫がなあ、あちこちこわしよるかもしれへんしなあ。

恒吉 もう！おぼえときよ！美咲にいいつけてやるから。

律 気をつけてな、つねきち。

恒吉 つねよし。（去る）

匡、厨房へ。

律 ナオって？

匡 （奥から）そのうち来るやろ。姉ちゃんは？

律 見送り。

匡 （コーヒーを持って出てきて）あそう。（と飲んで）うっなんやこれ？！

律 コーヒー。

匡 何杯入れたんや粉。

律 フィルターの一番上まで。

匡 お前あほか。

律 店番してやってんだろ。

居候やろ、それぐらいせえ。  
お前も居候のくせに。  
なにがや。  
出戻り。  
？  
逃げられたくせに。  
男の場合は出戻りなんか言わへんねん。  
じゃなに？  
帰っただけ。  
おかえり。  
ただいま。  
．．．  
暗いな（と電気を最大限に明るくする。）  
（不審げにみて）  
誰か来た？  
は？  
俺の事探しに。  
（首を振る）  
姉ちゃんから連絡は？  
別に。  
遅いな。  
ついていっちゃったんじゃない？  
．．．  
．．．  
そんな勇気ないか。  
．．．  
（鼻歌でスケッチにもどる、テレサテンを）♪だからお願いそばにお  
いてねえ！  
うるさい。  
お姉ちゃんいなくて寂しそうだから励ましてあげてんだろ。（更に大き  
な声で）♪そばにおいてねえ！  
（丸テーブルの上にある観葉植物をかばうように抱いて）．．．この木  
の近くで歌うな！

律 は？  
 匡 この木のそばででかい声だしたり歌うたっただらばくぞ。  
 律 ?  
 匡 わかった？  
 律 (一応うなづく)  
 匡 だいたいお前なにしにきてん。  
 律 高ちゃんの付き添い。  
 匡 付き添いなんかいらんやろ、身体がどうかなったわけでもないのに。  
 律 今の高ちゃん見ればわかるだろ。  
 匡 そやけどお前いっこも世話なんかしてへんやないか。  
 律 リハビリっていうのはねえ甘やかすのが一番悪い。  
 匡 ほお(といいつつ何気なくスケッチをのぞきこむ)。  
 律 やめろよ！

とりあい。ぱらぱらと落ちるクレパス。律ぶすつとしてひろう。

匡 学校は？  
 律 とっくに卒業しました。  
 匡 もうそんな年か。  
 律 おっさん子供扱いするな。  
 匡 誰がおっさんや。

律、ふくれつつらでまぶしすぎる電気を暗くしようと・・・

匡 おい！

にらまれて律、手を止めた所へ直人登場。腕に包帯。ちんぴら風。

直人 こんにちは。  
 匡 おうナオか。  
 直人 まさちゃんか、めずらしいな。  
 匡 また入ってたんやて？

直人 人聞き悪いこと言うなよ。あっちとちやうで、病院病院。  
匡 それもおつとめのうちなんやろ？  
直人 まあな、けど楽やでこっちのおつとめは。  
匡 そんなもんかねえ。  
直人 めし食って寝とったらええんやから。  
匡 まあな。  
直人 身体はってるけどな。  
匡 いい加減にしとかんと身体こわすで。  
直人 (笑) なんか変やな。  
匡 なにが？  
直人 自分から身体こわして商売しようやつにやなその・・・。  
匡 まあすわれよ。  
直人 うん(きよろきよろしている)。  
律 いらっしやいませ。  
直人 美咲ちゃんは？  
匡 ちよっと出とう。さっきまで待ってたで、恒ちゃん。  
直人 ああ。病院にも一回きてくれた。  
匡 へえなかなかやるなあ。  
直人 けど苦手らしいわ病院。  
匡 血みたら気絶するんやろ。  
直人 知ってるん？  
匡 一回試合観戦にきて気絶して運ばれよった。  
直人 ボクシングの？  
匡 ああ。  
直人 このコーヒーが恋しくて毎週抜けてくるねん。(律に) あコーヒーね  
ブレンド  
匡 まだ入院中？  
直人 まあな。  
匡 ええんか。  
直人 すぐそこやもん。  
匡 折れとん？  
直人 まあな。

匡 へえ。  
直人 複雑骨折や。  
匡 自慢すんな。  
律 (コーヒーをとんと置く)  
匡 お待たせしました。  
律 お待たせしました。  
直人 可愛い子やとってんな。  
匡 一応従姉妹、あんなん雇うか。  
直人 へえ、遊びにきてるん？  
匡 まあな。  
直人 これこれこの匂い、ブレンドテイステイ(と訳のわからないことを言いつつにおっている、飲んで)・・・こほっけほっ。  
匡 (目があって)今日はサービスで濃いめや。豆も特別高いやつなんや。  
直人 へえ・・・(おそろおそろ飲む)・・・やつぱり・・・うまいなあ。  
匡 (がくつ)？・・・そうやる。  
直人 おかわり。  
匡 ?あ、ああ律三番さんおかわりね。  
直人 りすか。  
匡 りつ。  
直人 みつ？  
匡 まあなんでもええけど。  
直人 奥さん元気？  
匡 ん、ああ。  
律 お待たせしました。  
直人 ありがとうございます。仕事は？  
匡 まあ飲めよ落ち着いて。  
直人 うん、ああほんまにおいしいわこれ。りすちゃん美咲ちゃんより上手なんやなあ。  
匡 ?んああ。  
直人 今何時や？  
匡 二時四十分。  
直人 ふうん。

匡 待ち合わせか。  
直人 ううん、うん。  
匡 どっちや。  
直人 まあそんなところや。  
匡 そっか。  
直人 あっカップ変えたん？（と無邪気にみている。）なんかちよっこおへん間に雰囲気変わったなあ。やっぱり娑婆はええなあ。  
匡 （咳払い）で、景気の方はどないや？  
直人 け、ケーキ？  
匡 いやそれ（腕）結構とれたんやろ。  
直人 ああそれがなあ、思ったより軽かってん。  
匡 複雑ちゃうんか。  
直人 そうやねんけどランクがなあ・・・まあいろいろあるんや。  
匡 けどまあそれなりなんやろ。  
直人 それなりにはなあ、へへ（嬉しそう）。  
匡 へへ（合わせて笑う）なあ、ちよっとまわされへんか？  
直人 なにを？  
匡 いやだからそれ。  
直人 ？・・・まだ残ってるんか例の借金？  
匡 ああ。  
直人 大丈夫か？あいつら結構えぐいで。  
匡 だから大丈夫とちゃうねん（傷をみせる）。たのむわ。  
直人 貸してあげたいけどあかんねん。  
匡 持ってるんやろ？  
直人 （大事そうに懐を押さえながら）これは兄貴に全部わたさなあかんから。  
匡 貸してくれるだけでええねんから。  
直人 まさちゃんわかってるやろ、あかんねん。  
匡 （ふと律の視線も気になって）・・・ほしたらゆっくりしていけよ。  
直人 ありがとう。あつまさちゃんお金借りてたやろ。  
匡 は？  
直人 ちよっどよかった。

匡 金？

直人 ジュース。半年位前その交番の所ではったり会って買ってくれたや  
ん。

匡 120円か、いらんよそんなもん。

直人 あかんあかん。貸し借りはきちんとせんとあかんって僕小さい時から  
言われてるねん。はいありがとう。

匡 お前やくざのくせに変な奴やなあ。

直人 はい。

匡 また今度おごってくれ。じゃあまたな、無理すんなよ。

直人 うん。

匡 (二階に行きかけて) ナオ、お前の舌ちよっとおかしいで。

直人 舌？

匡 ついでにみてもらえ病院で。

直人 ？

美咲、登場。買い物袋などもっている。

美咲 (律に) ごめんね、遅なって。匡帰ってきた？

律 (あごで匡を示す)

美咲 まあちゃんあんたゆうべ・・・

匡 俺ちよっと頭いたいから寝るわ(二階へ消える)。

直人 美咲ちゃん。

美咲 ああ。

直人 久しぶり。

美咲 もうええの？

直人 こんなんたいしたことないよ。

美咲 抜けだしてきたんやろ？

直人 あたり。どこ行ってたん？

美咲 うんちよっと。

直人 今日はいえらいめかしてるなあ。彼氏がきてたんやろ。

美咲 あほ。(律に) 高ちゃんは？

律 上。

美咲 誰か来た？  
律 つねきち。  
美咲 え？  
律 おかま。  
美咲 ああ恒ちゃん。  
律 もう私いい？  
美咲 ああ助かったわ、ありがとう。なあ、そこにはってあった絵知らん？  
律 さあ。  
美咲 キリンの絵。  
律 知らない。  
美咲 そう（あれこれ片づけ始める）。  
律 （観葉植物を指して）・・・これ、匡の？  
美咲 ？ああそう。美香ちゃんと結婚する時、家に緑が欲しいっていうから一緒に選んでん。  
律 美咲が？  
美咲 変な結婚プレゼントやったけど、結局美香ちゃんには可愛がってもらわれへんかったみたい。その子も出戻り。  
律 へえ。  
美咲 毎日かまわなあかんし結構面倒臭いからそういうんも。  
律 美咲はまめだからね。  
美咲 それのそばで大きい声出したらあかんねんよ。  
律 なんで？  
美咲 さんしょの木の下で歌を歌ったら枯れてしまうねん。  
律 ・・・？  
直人 あ、それうちのおばあちゃんも言うてた。  
美咲 これにはねえ、ほんまに科学的な根拠があるらしいよ。人間の吐き出す空気の中にあるナントカカントカゆう物質が有害やねんで。  
律 これさんしょ？  
美咲 ちゃうちゃう。けどまあちゃんはその話をほんまに信じてて、どんな植物でもそばで歌うたら枯れてしまうと思ってるみたい。  
律 カエルとかさんしょとか・・・。  
美咲 カエル？

律 ( 適當につけていたエプロンをはずしスケッチブックを持って外へ )  
美咲 ! 立ち聞きしてたん?

律 あ、何か変な二人組きたよ。男と女東京かららしい。そのうちまた来そう。(出ていく)

電話。美咲しばらくみつめている。

直人 . . . .

美咲 もしもし . . . . ( 受話器を置く )

直人 悪戯電話?

美咲 このごろ多いねん。

直人 今度かかってきたら僕がでてあげるわ。

美咲 ありがとう。コーヒー入れる?

直人 ああ . . . もうええわ二杯も飲んだから。

美咲 二杯も?めずらしいねえ。

直人 あの子おもしろいね、りすちゃん

美咲 りす?ああ . . . いらっしやいませ。

菜末、登場。

一見して堅気の風ではない。直人氣付いてきつと立ち上がる。

直人 来てくれへんかと思った。

菜末 なんで? 約束してんから来るに決まってるやろ。わざわざ出てこんでも病院まで行ったげたのに。

直人 あかんよ。あんなむさ苦しいとこにきたら。

美咲 いらっしやいませ。

直人 あっち移ってもいい?

美咲 いいよ、好きなとこ座って。

菜末 あ紅茶、ミルクもレモンもいらんから。(直人に)痛い?

直人 たいしたことないよ。指落とす方がなんぼか痛い。あれやな、けがの大小もあるけどこういうこまい(細かい)とこの方が痛いもんやな。虫刺されかって足の指とか刺されるとたまらんもんな。こっちのこの指落

とした時はそれもう・・・ようある話やけどないところがなんや今でも痛いような気がするぐらいで・・・。

菜未 やめてよそんな話、気色わるい。

直人 ごめん。

菜未 それで？

直人 ああ・・・これ（封筒を出す）。

菜未 （中をみて）これだけ？

直人 思ったよりけが軽かったんや。

菜未 そう。

直人 怒りはるやるか。

菜未 うまいこと言うと言ってあげるわ。

直人 うんありがとう。

美咲 はいお待たせしました。ごゆっくり（気をきかせて厨房へ）。

直人 今度はもうちょっとうまいことやるから。

菜未 前もそう言うてたくせに。

直人 ああ。

菜未 うちの人、この頃勝田さんに追い上げられて機嫌悪いねん。

直人 兄貴に限ってあんな奴に負けるなんてことないよ。

菜未 あんたがそういうこと言うとかえって勝てるような気いせえへんわ。

（と、たばこに火をつけようと）

直人 （正常な方の手ですかさず火をつける）

菜未 あの人のなあ、私に手あげるようになってん。

直人 姉さんに？

菜未 やめてその言い方むかつくわ。

直人 そやけど・・・。

菜未 高校の時みたいに呼んでよ。

直人 そそやけど・・・なっちゃんもう今は兄貴の。

菜未 兄貴なんか言う言葉も嫌いやわ。

直人 ・・・・なっちゃん。

菜未 ・・・・こあざになってるやる。

直人 （そっとふれる）

菜未 あんたのけがが治ったら二人で逃げよか。

直人 . . . .

菜未 今一瞬本気にしたやろ。

直人 . . . .

菜未 あほ、なんで私があんたみたいな人と逃げるんよ。どっちにしてももうちよっとまじなん掴まえるわ。

直人 なっちゃんやったらいくらでもええ人がみつかるとよ。

菜未 そしたら何、うちの人と私もうあかんとでもいうん？

直人 いやあ . . . .

菜未 もう行くわ。今度はもうちよっとがんばらな知らんよ。

直人 ああうん。

菜未 これ（小さな包みを出す）。

直人 （あけてみて）おまもり？

菜未 勘違いせんといてよ。みんなの分こないだ九州行った時買ってきてん。

直人 あああ。

菜未 それが最後に残ってたから。残りものには福があるってこういう時に使うんやろ。

直人 ああたぶん。

菜未 （封筒の中から一枚ぬきとり）はらっといって。（いきかけて）ここのお店の名前ナオにびったり。のんびりしてばかみたいでいっつも眼だけ哀しそうにして . . .

直人 . . . .

菜未、ふいに直人の腕の包帯に触れる。そしてにらむようにみつめて去っていく。

直人 （しばらく呆然とおまもりをにぎりしめ、菜未の去った方をみつめて

いるが）ごちそうさま。

美咲 （出てきて）もう帰りはったん？

直人 うん。

美咲 どないしたん、顔色悪いよ。

直人 僕病人やもん。

美咲 まあそうやけど。

直人 高校のなあ同級生やってん。

美咲 ? あああの人? 同い年にはみえへんねえ。

直人 . . . 病人は病院帰るわ。

美咲 またいつでもも抜けてきてね。たまにはケガしてへんナオに会いたいけど。

直人 もう指も足りへんし無理や。

美咲 . . . 。

直人 ありがとう(去る)。

美咲 見送って、酒瓶を出し飲む。

美咲 (奥に) まあちゃん、まあちゃん、いるんやろ起きて。こんな時間になんで寝ることがあるんよ。具合悪いんやったら薬あげるから。まあちゃん!

匡、 のそっと二階から出てくる。

匡 なんやその顔。

美咲 なんやって。

匡 似合わへん。

美咲 化粧変?

匡 おばけみたい。

美咲 うそ。

匡 (また水を飲んでいる) ナオは?

美咲 帰った。

匡 姉ちゃん。

美咲 ん?

匡 なんでもない。

美咲 言うことがあるやろ。

匡 . . . すいません。

美咲 やっぱりあんたやったんやね。

匡 ちよっとやばいねん。

美咲 なにが？  
匡 説明しても姉ちゃんにはわからへん。  
美咲 だからって泥棒みたいなマネしてええと思ってるん。  
匡 お楽しみの邪魔になると思ってる。  
美咲 邪魔やわ、ものすごい邪魔されたわ。  
匡 ……ごめん。  
美咲 今度はいくら？  
匡 ……。  
美咲 あれ全部いるん？  
匡 返すよ。  
美咲 嘘ばっかり。  
匡 嘘とちゃうよ。  
美咲 ……美香ちゃんね、もしかしたら東京の方へ行ってるかもしれへん。  
匡 ?  
美咲 敏也さんが知り合いに頼んで探してくれてるんよ。  
匡 頼んでへんで。  
美咲 もう一回会って話してみたいって言うてたやろ。  
匡 もうええねん。  
美咲 そんなこと言うて、そしたらいつまでここにいてもいいんよ。  
匡 ……。  
美咲 この店の事だけは勝手にせんとつてね。私お父さんに約束したんやから。  
匡 まだまだ必要なんや。  
美咲 いくら？  
匡 ああ暗い暗い暗い。  
美咲 待って（電気）つけるから（と、既に一番明るくしてあることに気付く）…。  
匡 姉ちゃん（と鼻がつく位顔を近づける）、飲んでるんか？  
美咲 ほっといて。  
匡 あいつ帰った？  
美咲 あんたに関係ないやろ。  
匡 いつか女房と別れて迎えにくるんか？

美咲 ……。

匡 そしたらここ捨ててついて行くんやろ。

美咲 わからへん、その時になってみると。

匡 おやじとの約束なんてそんなもんやんか。

美咲 今そんな話してへんやろ。

匡 ……どこにも行かへん。

美咲 え？

匡 姉ちゃんはずっとここにおるんや。

美咲 どないしたん。

匡、いきなり指で美咲の唇にふれ口紅をぬぐう。

美咲 なにすんの。

匡 何色やこの口紅？

美咲 ……ピンク。

匡 忘れたんか。

美咲 ……。

匡 俺には青に見えるんや。

一瞬みつめあう二人。

暗転。波の音。

### 三場

高子

父の会社がなんとか再建できるまでという親同士の約束を、子供の私達はむしろ大歓迎で受けとめていました。もともと従姉妹の美咲とは仲良しだったし、東京に帰ってからも時々恋しくなる程、ここで過ごした五年間は思い出深い時間だったのです。今はもう叔父さんもなくなって美咲が喫茶店を続けています。灰色の海を描いていたのは美咲の弟の匡で、彼は生まれつき正確な色を見分けることのできない病気でした。そのことを知っていたのは叔父さんと美咲をのぞけば多分私だけだったと思います。彼はそれを人に知られるのをとてもいやがっていました。け

れども匡の描く絵はなんていうか・・・とても不思議な色遣いで誰にもまねのできない魅力的な絵だったと思います。あなたもご存じの私の旋律を含めた私達四人はとても仲良しでした。いつもいつも一緒にいたような気がします。

毎日優しいお手紙をありがとう。こうして離れているとあなたとの壮絶ともいえる日々が遠い昔のことにように思え、なぜか楽しかった思い出ばかりが蘇ってきます。やはり海の近くにいたせいなのでしょう。真っ青な海をみる事ができる自分をしあわせに思います。あなたのお手紙を読んでお返事を書くことが私の日課になりつつあります。

翌月十月の「きりん」。壁には新しくそしてまた妙な色彩の絵が飾ってある。

敏也がガラスの破片をあつめている。

高子ふと立ち上がりそのひとつを拾おうとする。

敏也 あぶないよ、気をつけて。

高子 ……すいません。

敏也 ……今なんて？

高子 すいません。

敏也 ああびっくりした。

高子 私も。

敏也 元気になったんですね。

高子 ……わかりません、急に声が。

敏也 そう・・・あ、美咲達すぐもどると思うから。

高子 知ってます。私あのここにいましたからずっと。

敏也 あ、そうだよね。そうだった、そうだった。

高子 敏也さん、ですよね？

敏也 はじめまして。

高子 高子です、はじめまして。

敏也 変な気分だな。

高子 私も・・・今までも確かにみんなの声が聞こえていたしここにちゃんと存在していたんです。でもなんだか自分のまわりにだけ透明の壁があったみたいな感じで。

敏也 気分は？

高子 大丈夫です。声出してみるとなんだか思ってたより簡単だったみたい。

敏也 そう。・・・僕これ（ガラス）かたづけてくるから。

高子、残っていたガラスの破片を一つ手にとる。かざしてみる。

律、登場。買い物袋をさげている。

おすっといった感じで高子に手をあげるとあたりをみわたし、観葉植物を手にとる。

律 （でかい声で口を近づけ）あーっわおーっあーっアオ！

高子 りっちゃん。

律 ……。

高子 何してるの？

律 高ちゃん？高ちゃん！（抱きつく）

高子 急に声が出た。

律 気分は？

高子 大丈夫。

律 おふくろに電話だな。

高子 ちょっと待って。

律 ……うん。

高子 美咲は？

律 警察で手間取ってんだろ。

高子 石投げて割るなんてね。

律 二回めらしい。

高子 あっそこ、まだあぶないよ。

律 うん。愛人は？

高子 ？ああ捨てにいった。

律 そうか。（観葉植物に）やったあーっ！

高子 なにそれ？

律 いいのいいの。

高子 このこと隆さんに知らせなきや。

律 ……。

高子 りっちゃんに言ったら怒られるから黙ってたけど、あの人ね毎日お手紙くれてたの。私のこと忘れられないって。

律 ……そう。

高子 そりゃあの人にされたこと忘れたわけじゃないよ。つきまとわれて恐かった。でもそれだけ私を好きでいてくれたって事でしょ。

律 高ちゃん、

高子 わかってるって。そんなに簡単に許したりはしないから。でもあの人も心配かけたんだから元気になったことだけは報告しなきゃ。

律 ……。

高子 部屋にいるね（二階へ去る）。

律 ……。

和恵、登場。

律 今日はやってないんで。

和恵 （しゃっくり）

律 ああ。

和恵 こんにちは。

律 どうも。

和恵 なにかあったんですか？

律 ちょっとね。

和恵 ……。

律 すわる？すごい顔色わるいけど。

和恵 いいですか。なんだか気分が…。

律 あっそこはだめ（ガラス。何気にやさしくすわらせる）。水飲む？

和恵 ごめんなさい。

律、水をいれに奥へ。いきながら植物にまた叫んだりしている。

律 はい。

和恵 ありがとうございます。あの…おまじない？

律 ？

和恵 あーって。

律 まあね。これやると悪い気が散って元気になるらしい。

和恵 へえ。

律 今日はぼうふうみたいなの奴は？

和恵 ぼうふう？

律 (マネして) こんな奴に負けるのかよお。

和恵 (笑って) あなたといると楽しくなるのわかるな。自分がね、こんな立場になるなんて思ってもみなかった。

律 ……愛人の・奥さん？だよな。

和恵 はじめまして、(しゃっくり) じゃないか。

律 もう一回位くるとは思ってたけど。

和恵 妊娠してるの。

律 ……。

和恵 格好良く許してあげられると思って帰っただけだよ。つぱりダメみたい。ここに来てるでしょ？

律 さあ。

和恵 (突然) とぼけないで！(しゃっくり)

律 ……元気あるじゃん、その気になりや。

和恵 からかわないで。

その間に和恵の視野に入らないところから敏也が帰って来る。そつと二階へ。律、気付いて、突如和恵に襲いかかり(？)、怪獣のマネなどして彼の姿を隠そうとする。

律 ガオー！がガオー！ヒュルルル……

和恵 ？？

律 ……すいません。(水のお代わりをいれて) 飲めば。

和恵 (水をにらんでいる) ……私こんなことするなんて。

律 すいません。

和恵 ……会わせてくれる？

律 今朝帰りました。

和恵 ……そう。

和恵、放心したように退場。

律、植物を持ち上げて口を開けるが、やめる。

匡登場。頬に殴られたあと。

匡 （割れた窓をみて）やられたんか、また。

律 相当ね。

匡 くそっ 恒ちゃんとは猫がやられたんや。

律 猫？

匡 あいつ先月から捨て猫かわいがってん。

律 へえ。

匡 連れていかれたらしい。朝から泣いたり騒いだり大変や。

律 猫が？

匡 話ちゃんと聞け。恒ちゃんが！猫がいなくなったから！

律 ああ、またしけたアルバイト。

匡 あいつが来る日だけな。あいつは？

律 （二階を指差す）

匡 （うなづく）

律 女房来た。

匡 今の？

律 （妊娠）だとき。美咲もそろそろきついねえ。

匡 ……言うなよ、そのこと姉ちゃんに。

律 なるべくね。それで、お前は誰にやられたわけ？

匡 ……かせ（と、植物を律の手から奪う）。

律 世話してやってんだろ。

匡 この世話は俺か姉ちゃんがやるから。

律 はいはい。

匡 はいは一回。

律 へえへえ。

匡 ……姉ちゃんは？

律 警察。

匡 お前としゃべると会話にならへんな。

律 それはどうも。  
匡 ほめてへん。  
律 とにかく私ちよっと出てくるから。美咲の役は結構疲れたし。  
匡 ?  
律 美咲が帰ってきたら荷物そこに置いてあるって伝えて。  
匡 了解。  
律 (行きかけて) お前ってさあ、最近絵とか描かないわけ?  
匡 さあ知らん。  
律 あそう(外へ)。

匡、レジへ。引き出しなども探ってみるがめぼしい物がないらしい。  
敏也が荷物をもって二階から降りてくる。見渡して安心し匡を見て、

敏也 ああどうも。  
匡 ……逃げるんか。  
敏也 いやあ、あぶなかったよ。  
匡 子供できるんやって。  
敏也 え?(本気で驚いている)  
匡 知らなかったでは済まへんやろ。  
敏也 ……ああ。  
匡 やばいんとちゃうの。  
敏也 すぐその手を使うんだよ。  
匡 その手?  
敏也 結婚した時もそうだった。  
匡 だからって今度もそうとは限らへんやろ。  
敏也 まあね。  
匡 カッコつけんなよ。  
敏也 悪いと思ってるよ、どうしようもなくてね(行きかけて) ……あ、あの  
奥さんの事なんだけど千葉の方で見かけたという人がいるんだよ。親戚  
匡 いるんだってね。だから…  
敏也 うるさい!  
……。

匡 頼んでへんよ。  
敏也 そうか。  
匡 遠くへいってくれ、あんたも？  
匡 姉ちゃんから見えへん所へ。  
敏也 (植物をさして) これ何て名前？  
匡 ……これが好きなのはな、花が咲かへんからや。  
敏也 ……ここにくるとよく寝られるんだ。  
匡 じゃあずっとここにおれ。  
敏也 ……。  
匡 どっちかにしてくれよ。  
敏也 もう一回夏の海がみたいなあ。  
匡 海なんかいっつもおんなじや。だだっぴろいだけや。  
敏也 同じ場所にホクロがあるんだな。  
匡 ?  
敏也 美咲と。こんな風に会わなけりや友達になれたかもな。  
匡 俺はごめんや。  
敏也 (荷物を持って) じゃあ美咲によろしく。  
匡 ああ。

敏也が去りかけたところに美咲が帰ってくる。

美咲 どないしたん？  
敏也 急用ができて。  
美咲 そう。  
匡 またやられたんやって？  
美咲 うん。  
敏也 じゃあ  
美咲 送っていくのに。  
敏也 いいよ、今日は大変だから。  
美咲 いつもと違うことするのってなんかいややねん。  
敏也 そんな時もあるよ。飲み過ぎないように。

美咲 旅行行こね。

敏也 ……ああ。

美咲 いつ？

敏也 ……。

美咲 来月？その次？

敏也 ……。

美咲 (笑) ほらすぐ動揺する。

敏也 ・夜の見張りは匡くんによってもらえよ(行こうとする)。

美咲 やっぱり送っていくわ。

敏也 いいんだ！

美咲 ……？

敏也 片づけ大変なんだから。

美咲 どないしたん？

敏也 「ぎりん」 って名前すごくいいと思うよ。

美咲 ……？

敏也 それじゃ(去る)。

美咲 しばらく見送っている。

匡、素知らぬ顔で植物に霧吹きで水をかけたりしている。

美咲 恒ちゃんどこに居たん？

匡 うん。

美咲 (あざを見て) どないしたんここ。

匡 そこ買物。

美咲 ああ。

匡 姉ちゃん(右の首筋を見て) ほんまやホクロ。

美咲 なによ…。(窓に目をやり) ああもうどないしよ、また修理に時間かかるわ。

恒吉登場。興奮している。

恒吉 あんた！匡！

美咲 どないしたん、恒ちゃん。

匡 なんや。

恒吉 なんやとちゃうやろ、しらばっくれて！

匡 はよ出し！

美咲 まあちゃんどないしたん？

恒吉 この子うちの実印持ち出してるねん。

美咲 実印？

恒吉 保証人になってくれ言うて断ったら私の留守に。

美咲 まあちゃん！

匡 知らんでそんなん。よう探してみろよ。

恒吉 よう言うわ。子供が目撃してるんやから。はよ出しゆうたら！

美咲 まあちゃん、持ってるんやったら出して。

匡 うるさいなあ（と出す）。

恒吉 ちょうど土地のことで印鑑のいる書類を持ってきた人がおってすぐ気がついたからよかったけど、あんたこんなことしてただで済むと思ってるの。

匡 借りただけや。返すやろ。

恒吉 この泥棒！よくもぬけぬけと！親のお金でボクシングやらなにやら好き放題して、そのあと何やっても長続きせんと女房にも逃げられて、その上ようさん借金こしらえてこんなことして！最低の人間やわ。あんたみたいなんに比べたらナオちゃんの方がどれだけりっぱか。

匡 そんなこと自分が一番わかっとうよ。なあわかっとうからちよっとだけそれ貸してくれよ。恒ちゃんには迷惑かけへんから。

恒吉 あほ！あんたに返せるわけないやろ、また美咲に頼るくせして。美咲、あんたとは友達やけどこの子ともう縁切るわ。

匡 貸してくれよ！

恒吉 いい加減にしいよ！ジョニーはおらんようになるし今日は最悪の日やわ（ふりふりして去る）。

二人の会話の間に美咲は隠れて飲んでる。

美咲 ……誰？ジョニーって。

猫。

．．．。

匡 このガラスやった奴やろ、猫誘拐したんも

美咲 まさか。

匡 そういうことするやつらやねん。

美咲 あんたそんな人らと？

匡 うわさうわさ。

．．．。

匡 姉ちゃん、金貸してくれ。

美咲 ．．．。

匡 払わなかったらここにまで取り立てにくるかもしれへん。

美咲 これ以上おどかさんといてよ。あっ（あの音。耳を澄ます）．．．。

もうなんにもないよ。あとはこのお店だけ．．

匡 どっか行こか、二人で。

美咲 あんた一人で行き。

匡 はあーってしてみ。

美咲 はあーっ。

匡 また飲んでるんか。

美咲 もう夕方やろ。

匡 似合わへんで。

美咲 よう言うわ。そしたら心配かけんといて。恒ちゃんを騙したりせんといてよ。

匡 ああ。そしたら姉ちゃん飲まんですむんか。

美咲 胸が楽になるねん。それとあの音が聞こえてくる。

匡 どんな音なんや？

美咲 海の音。

匡 海？

美咲 沈んでいく音やねん。ぶくぶくぶくぶく．．．なんか呼ばれてるよう  
な気がして。

匡 ．．．。

美咲 恐いけど聞いているうちに安心してくる。なあまあちゃん、昔その海  
で溺れた時の事覚えてる？

匡 . . . .

美咲 高校三年の夏、高ちゃんとりっちゃんそれぞれから . . . そうや恒ちゃんと五人でながい、くじらっというんやっけ？ボートにひっばってもらう丸太みたいなんに乗って、ほらぶくんってちよっと走っただけで丸太が簡単にひっくり返って . . .

匡 みんなわあわあ言いながら泳いでんのに姉ちゃんだけ何にも言わんと沈んでいった。

美咲 そう、ぶくぶくぶくぶく。

匡 気がついたら姉ちゃんだけおらへんかった。

美咲 あのまま沈んでもいいなあって思ってた。

匡 嘘つけ、助けにいったらすごい力でつかまってきたやろ。

美咲 だから言うたやん。「まあちゃんこのまま一緒に沈んでいこか」って . . . .

美咲 まあちゃんいつのまにかがっしりしてて私より大きくなってたのもしかった。

匡 なに言うトンねん。

美咲 苦しいはずやのにずっとそのままでいたかった。まあちゃんにしがみついたまま、ぶくぶくぶくぶく沈んでいきたかった。

匡 めっちゃ重たいねんであれ。

美咲 うんって言わへんかった？あの時うんって、一緒に . . .

匡 酔っぱらってるんか . . . ?

美咲 まあちゃんはいっつも私のこと助けてくれたのに今は困らせてばかり . . . .

匡 . . . .

美咲 電話でて！

匡 なってへんで、電話なんか。

美咲 . . . . あの人なんで急に帰ったんかなあ。

匡 姉ちゃん大丈夫か？

美咲 電話が気になって気になって、にらんでるうちに鳴ってほしいんか鳴るのが恐いんかわからへんようになった . . . 家の中で溺れたって誰も助けてくれへんのにねえ。

匡 姉ちゃん、そんなにあいつが好きなんか？

美咲 あいつって誰？

匡 . . .

美咲 もう二階へ上がる。まあちゃんおんぶして。

匡 おんぶ？

美咲 ほら、私もう溺れそう。

匡 しょうがないなあ（と背負う）。

美咲 いやがらせに抵抗なんかしててもどうせ勝たれへんねんから、売ってしまおかこの店。

匡 . . .

美咲 そしたらまあちゃんも助かるんでしょ？

匡 まあな。

美咲 伊丹にいる友達がね、仕事誘ってくれてるねんよ。

匡 あかん。

美咲 なにが？

匡 姉ちゃんはここにおるんや。

美咲 子供みたいに。

匡 . . .

美咲 なんで同じとこにホクロあるんかなあ . . .

匡 ん？

美咲 いややわこんなホクロ！

匡のホクロに手をのばし、つまもうとする美咲。

匡はよけようとするが、ひっこい美咲の手を払い避け掴んでやめさせようとするうちにいつしか二人は抱きしめあう。

間。

律が飛び込んでくる。二人の姿に一瞬かたまる。

美咲 . . . どないしたん？

律 恒吉の猫が浮かんでる。

美咲 浮かんでるって . . .

律 その海。恒吉がパニックって大騒ぎしてる。

美咲 どういうこと？

匡 見てくる(出ていく)。

美咲 . . . なんてそんなひどいこと。

律 泳いでるみたいにみえた。

美咲 ?

律 猫が泳ぐわけないか、猫かきなんてないもんね。

美咲 私も(行こうと)、

ガシヤンガシヤンとまたガラスの割られる音。

美咲 警察にとどけよ(電話に向かうがどうしても受話器を取ることが出来ない。)

律 . . . 愛人の嫁さん来たよ。

美咲 ?

律 (妊娠) これだって、具合悪そうだった。

美咲 いつ?

律 今日 . . . それから前にも一回来た。

美咲 そう。

律 それで愛人逃げてった。

美咲 . . . 男の人の場合も愛人っていうんかな?

律 何それ? なりに落ち着いてんの。

美咲 だってしょうがないやろ。それよりも電話 . . .

律 待てよ!

美咲 なによ?

律 嫁さんが来たんだよ、興奮して青くなって必死こいて。それで平気なのかよ!

美咲 平気とちやうよ。

律 平気だよ、余裕だね。そういえば美咲ってさあ昔から年下の男にモテんだよね。本当は愛人の事なんかたいして好きでもないんだろ?

美咲 どないしたんよ。

律 うわっうわあ自信たっぶり!

美咲 りっちゃん!

律 お姉さんぶってんじゃねえよ。そういう風にやさしそうにわかったよ

うな顔して・・・むかつくんだよ。むかつく！むかつく！（落ちつきなく叫び続ける）

美咲  
.....

律  
なんだよ！アル中！店中酒くさいんだよ！あゝいらいらする。うっとうしいむかつく！わあ！つむかつく！

美咲  
なによ！あなたに何がわかるんよ！関係ないやろ！関係ないやろ！

律  
うるさい！美咲なんか嫌いだ！（走り去る）

動けない美咲。暗転。

#### 四場

高子  
美咲を抱えて海からあがってきたときの匡のあの誇らしそうな顔、今でもはっきり覚えています。ずぶぬれの身体からはもうもうと湯気が出ていた。美咲は王子様に助け出された眠り姫のように、やすらかですぐそんな様子でした。そう、まるでたった今あの海から生まれてきたみたいに二人はみんなの前に現れたのです。私と美咲が高校三年の時、私にとってはこの街で迎えた最後の夏でした。口をへの字に結んだ律が突然ぺっとつばを吐いて走って行ったこと、太陽がまぶしくて何だか泣きなくなったこと、昨日のことみたいに思い出せます。

その夜のきりん。布に包まれたジョニーを抱いた恒吉。

横で髪を濡らしたままの匡がタオルなど持ってやっとな落ち着いた風情。

そして律。

恒吉  
（泣いている）あんまりやわ。この子になんの恨みがあるんよ。

律  
おら（と、コーヒー）。

恒吉  
ありがとう（けどまずそう）・・・この子ね私の手から直接でしかもの食べられへんかってんよ。歯も抜けてしても小さい声でしか鳴くこともできへんかったんよ。なんにも悪いことせえへん子やのに。

律  
それ匡のバイト中に迷い込んできた捨て猫だよな。

恒吉  
ジョニー。

律 ジョニーね。

恒吉 ジョニー。

匡 うるさい。

恒吉 ジョニーはあんたになつてたやないの。あんたかつて可愛がってたくせに。なあジョニー。ジョニー。

匡 救急箱とってくれ。

律 足か(とりに行く)。

匡 たいしたことない。(律のぞきこむ)

律 ガラスかなんか踏んだだけや。

匡 コーヒー飲む？

律 これ以上具合悪くなりたくない。

恒吉 . . . . .

恒吉 私決めたわ。前から決めてたけどもう今日という今日はほんまに決心した。なにが新都市計画や。大きいビルやら停留所やらつくりさえしたらええと思つて。絶対許さへんから。殺されても立ち退かへんから！ジョニーの敵討ちのつもりであいつらと戦つてやる！女の執念思い知れ！！

匡・律 . . . . .

恒吉 なによ。

律 まあコーヒーでも飲めば？

恒吉 (おそろおそろのむ . . . うつ)。

律 なに？

恒吉 別に。

律 文句ある？

恒吉 別につてゆうてるやろ。なんか寒いなあ。

律 あ、そこ(正面のガラス窓)あのままにしてるから。ダンボールかなんか貼る？

高子 (登場していて)私そうじしようか。

匡 姉ちゃんは寝てたらええんや(気付いて) . . . ?

律 美咲が掃き掃除はしてくれたらしい。

恒吉 高ちゃんあんた . . . ?

高子 (二階からおりてきて恒吉の猫に触れて) かわいいそうに。

恒吉 口きけるん？

高子 うん。

恒吉 ようなったんやね。

高子 おかげさまで。

恒吉 いつから？

高子 よくわからないの、気がついたら。

律 高ちゃんもコーヒー飲む？

恒吉 あかんあかん、また悪なるって。

律 ……。

匡 姉ちゃんには？

高子 まだ話してないの。

匡 そっか。

高子 そこ修理しちゃおっか（思いのほかてきぱきとダンボールなど探してきて修理をはじめようと）あっ…

孝弘と和恵、登場。

孝弘 こんにちは。

律 （マネして） こんにちは。今度はぼうふらも一緒か。

恒吉 ああ。

匡 今度はなにごとや？

律 愛人の妻（妊娠ポーズ）。

匡 ……。

孝弘 ……（と高子をみている）。

律 もうあいつは帰ったって言ったでしょ。

和恵 あの人のことはあの人が決めればいい、なんてそんなきれいな事じゃ済まないの。この子は私達の子供なんだから。

律 だから？

孝弘 姉さんがどうしても納得できないっていうんで。

律 なにが？

孝弘 きみ違うんだろ？

和恵 もう来るつもりなかったの。でもどうしても本当の美咲さんに会いた

くて。

恒吉 美咲って・・・じゃあ？

匡 恒ちゃん悪いけど帰ってくれ。

恒吉 ああ、あ・・・ほしたら美咲に・・・あのジョニーのことありがとう。

匡 間に合わんとごめんな。

恒吉 そしたらおうちに帰るなジョニー（去る）。

高子 来てくれたのね（孝弘をみつめている）。

一同 ？？

孝弘 あんたが？

高子 どうしてここがわかったの？

孝弘 あいつの仕事場を調べたんだ。

和恵 私ずっと前から気づいてたんです。でも黙ってました。いつか終わってくれるって信じてたから。でもそんなこと言ったらなくなったんです。

律 まあ座れば。

匡 おう座ってコーヒーでも。

孝弘 なんにもいりません。あなたは？

匡 関係ないやろ。

孝弘 あるでしょう。

高子 そうやってすぐ深刻になるからだめなのよ。

孝弘 なんだって？人の旦那を盗んでおいてそんな言い方はないだろう。

高子 わかってないのね。ひっこくされたら誰だっていやになるものなのよ。

和恵 ひっこくなんてしてない！私見て見ぬ振りをしてあげてたのよ。

高子 あなたの純粹な心や愛情が迷惑としか考えられなくなるのよ。

和恵 ひどいわ。どうしてそんなことが言えるの。

高子 でもここに来て毎日手紙を読んでお返事を書いているうちに、やっぱり好きなんだって事がわかってきたの。

孝弘 じゃあどうしても別れてくれないんですね。

匡 どうなっとんねん？

律 さあ。

高子 どうしてそんなこと言うの。

孝弘 子供が生まれるんです。

和恵 あの人がどんな風に言っていたか知らないけど、私達とてもうまくいつてるんです。あの人私と別れる気なんてないのよ。

高子 (クビをふる) いやよ、別れるなんて！

律 高ちゃん違うんだよ。この人達は美咲の・・・

高子 どうしてそんなこと言うの？また私を苦しめるの。

和恵 私は三年間も苦しんできたのよ！

高子 (孝弘にだけ話続ける) 私達うまくいったでしょ？私のこと好きだって、私だけが好きだって言ったんだから！本当なんだから！

和恵 私の夫なのよ！

高子 そうでしょ？好きだって言ったでしょ？

孝弘 どういうつもりなんだ。

高子 なんでもしてあげたじゃない、あなたの望み通りに。これ以上どこをなおせばいいの？

和恵 別れて下さい。

律 やめて！違うんだよ。

高子 いやよ！別れるなんて絶対にいやよ！

律 高ちゃん。

高子 誰にもわからないのよ。私達うまくいったんだからほんとに。放してったら！

律 高ちゃん！ほらちゃんと見て。違う人だよ。

高子 ……。

律 部屋に行こう(連れていこうと)。

孝弘 ちょっと！(和恵に) 姉さん・・・

律 違うって言うてんだろ。姉さんとか姉ちゃんとかべたべたすんなよ気持ち悪い。だから旦那もとられんだよ。(と、放心している高子連れて二階へ)

和恵 (二人を見送って) ……また間違えちゃったのね。

匡 飲む？コーヒー(と言いながらいれにいく)。

和恵 ばかみたい。からまわりばかりして。

孝弘 姉さんのせいじゃないよ。

匡 (黙ってコーヒーをおく)

和恵 (飲む・・・苦い) こほっ。

孝弘 大丈夫？

和恵 苦くて・涙がでちゃった・でもおいしい。(飲み続ける。匡それを見るときもなくみている)

孝弘 美咲さんは？

匡 留守や。

孝弘 嘘つくな。

匡 あいつがきたらおっぱらってやるよ。それでええんやろ。

孝弘 約束して下さい。

匡 なるべくな。

和恵 今の人とてもつらい思いしてたみたい・・ごめんなさい。行きます。

孝弘 いいの？

和恵 何となく美咲さんには会いたくなくなっちゃった。(行きかけて、降りてきた律をみて) あの、あれおまじない私にもさせて下さる？

匡 ?

律 . . .

和恵 ああああって言うの。

匡 (律に) 何や？

律 ちょっと今は・あ・外が暗くなってからは効き目がないから。

和恵 そうなの？じゃあ今度お昼間にうちでやってみる。

律 どうぞご自由に。

和恵 ごちそうさま。おいしいコーヒー。

匡 ああ。

和恵 (笑) すっごい嫌われてるんだなってわかりました、あれ飲んで。

匡 さすが。

和恵 おじやまりました。

孝弘もぶつきらぼうに会釈して姉弟退場。

残った二人、匡と律。

匡 落ち着いた？

律 薬のんで寝かせた。一人になりたいていうから。

匡 やっぱり病院の方がええんとちゃうか。

律 匡 ああ確かにね。  
 律 匡 あいつに似てるの？  
 律 匡 全然。もうちょっとマシ。  
 律 匡 よっぽどしつこい奴やったんやなあ。ストーカーなんて理解できへん  
 律 匡 けど。  
 律 匡 ストーカーは高ちゃんの方なんだ。  
 律 匡 ?  
 律 匡 男にふられて変になってどんどん思いこんで、毎日つけまわしたり何  
 律 匡 十回も電話したりみても恐かった。  
 律 匡 . . .  
 律 匡 最後にはね、何したと思う？劇薬もって相手を待ち伏せしてたって。  
 律 匡 一回は病院に入れたんだけどねえ。  
 律 匡 なに飲んでんだよ。  
 律 匡 美咲のドリンク。  
 律 匡 やめとけよお前まで。  
 律 匡 うそ。コーヒー( . . . )うわっ。  
 律 匡 自分が飲めへんもん人に飲ませるな。  
 律 匡 でも高ちゃん、お前の描いた絵のこといつも言ってたよ。  
 律 匡 ?  
 律 匡 灰色の海って。  
 律 匡 お前とちゃうんか、俺の絵まねしとん。  
 律 匡 まねなんかしてねえよ。  
 律 匡 どっちでもええけど。(動こうとして顔をしかめる) うっ。  
 律 匡 痛むの？  
 律 匡 たまには女らしい顔するねんな。  
 律 匡 . . .  
 律 匡 お前ここになににしにきてん？  
 律 匡 うるさい。  
 律 匡 ええ年して付き添いかなんかしらんけど、何カ月もぶらぶらしとって  
 律 匡 ええんか？  
 律 匡 お前にいわれたくない。  
 律 匡 . . . あああってなんや？

律 さあ。

律 なんやあやしいな、言えよ（とおいかける）。

律 うるさい！あつ（テーブルについた手をみる）。

律 ガラスか？

律 （痛そう）

律 どれ（見る）。たいしたことない。（放さない）

律 自分でやるよ。

律 動かすな。

律 いいって。

律 動かすな！

律 ……。

律 （刺さったグラスを口でちゅっと吸って出し）ほらこれでええやろ。

律 ……お前に会う為に高ちゃんについてきた……あんな色の絵が描

きたくて描けなくて、忘れられなかった……。（笑）嘘。

律 大人をからかうな。

律 勝手に大人ぶんなよ。

律 子供のままなんは俺の方かもな。（近づく）

律 （応戦の姿勢）

律 なんやそれ……かっこわる……ほれ（と応戦する）

律 イタツ……本気でやるなよ。

律 （いきなり律を抱きしめてキスしようとする……が我に返って……やめる）

律 ……美咲がほんとのアネキじゃないってこと知ってた？

律 ……？

律 お前と美咲は血がつながってないって。

律 ！？

律 知らなかったんだやっばり。

律 ……。

律 いい情報だろ。おめでどう（二階へ走り去る）。

匡、少し考えて引き出しやらなにやら探し始める。電話帳を出して電話をかけようと……そこへ再び律が現れる。

匡 まだなんかネタでもあるんか。  
律 高ちゃんがいなくなった。裏口から出て行ったらしい。  
匡 おい待てよ！  
律 (振り返りざま匡の頬をたたく)・・・(そして出ていく)  
匡 ……た…思いつきやりやがった…。

暗転。

## 五場

十一月。なんとなく更に閑散とした雰囲気の「きりん」。美咲と恒吉。美咲は堂々とカウンターで一杯やりながら、

恒吉 それで結局決まったん？  
美咲 うん。前から手伝ってって言われてたし。  
恒吉 ふうん。  
美咲 そんな目で見んといてよ。  
恒吉 最後まで戦かおって約束してたのに。  
美咲 ごめんね。  
恒吉 匡のせいなんやろ。  
美咲 恒ちゃんほんまにごめん。  
恒吉 もうあのことはええねん、結局返してもらってんから。けどあの子のせいであんたが苦労してる事おもったら・・・相変わらずなんやろ？  
美咲 どっちにしてもこんなままではやっていかれへんもん。お客さんは来いひんし、夜は心配で不眠症になるし身体もたへんわ。  
恒吉 私は負けへんよ。絶対ここ離れへんねんから。  
美咲 恒ちゃんは無理して働らんかんでもお母さんの残してくれはった土地やらなにやらいっぱいあるんやろ。私とはちやうわ。  
恒吉 私の友達は美咲だけやのに。  
美咲 伊丹なんか目と鼻の先やんか。  
恒吉 何年もコーヒーばっかりいれとったくせに事務なんかできるん？  
美咲 なんとかやってみるわ。友達がせっかく部屋まで用意して待ってくれ

てるんやもん。

恒吉 人に部屋貸してあげてた人が今度は間借りか。

美咲 そういうこと。

恒吉 (二階を指さして) は？

美咲 最後まで見届けてから帰るって。高ちゃん送って行ってそのまま又こ  
つちへ帰ってきた。

恒吉 けったいな子。

美咲 絵ばっかり描いてるわ。

恒吉 へえ．．．ちよっと美咲そんなに飲んで大丈夫？

美咲 うん。水曜日か．．．。

恒吉 そう．．．。

美咲 今日は来るかな、ナオ。

恒吉 え、いやや別に私は。

美咲 もうひとつき位来てへんもんね。

恒吉 あの病院なあ、あかんようになったらしいわ。

美咲 え？

恒吉 ナオちゃんのかかりつけの病院。

美咲 なんだ？

恒吉 ナオちゃんみたいな人ばかりが入院してたやろあそこ。

美咲 そうなん？

恒吉 前からマークされてたらしいわ。

美咲 誰に？

恒吉 そやから．．．警察やろ。

美咲 警察？なんで。

恒吉 なんでって、だから自分から無理に怪我したり、たいした怪我でもな  
いのに入院して保険金もらったりする人を受け入れたらあかんやろ普通  
は。

美咲 んん．．．。

恒吉 あそのの院長はそういう人達を受け入れて儲けてたんやって。

美咲 恒ちゃんなんでそんなこと知ってるん？

恒吉 週刊誌に載っててんもん。

美咲 へえ．．．そしたらナオも逮捕されてしまうん？

恒吉 逮捕やなんてそんな・・・。

美咲 まさかね。

恒吉 あほやわ、あの子。

美咲 え？

恒吉 あんな女のために。

美咲 ……。(入ってきた菜未に気付く)

恒吉 あんな女のどこがええんよ、利用されてるだけやんか。

美咲 恒ちゃん！

恒吉 意地の悪そうな顔して、趣味の悪い格好して。

美咲 あゝ……………。

恒吉 あゝと違うよ。ずかずか入ってきてお水もおかへんうちから 「お紅茶  
ちようだい」。あんた見たことある？あなたばこの吸い方(気づく)・・・  
あらいらっしやいませ。

菜未 (恒吉を無視して) お紅茶ちようだい。

美咲 ……はい。ミルクもレモンも抜きですね。

菜未 そう。

たばこを出して吸っている。

恒吉見えないように真似して美咲にほらほらと合図を送る。

恒吉と菜未、目が合う。

恒吉 いいお天気ですねえ。

菜未 今にも降りそうですけど。

恒吉 え？ああ・・・世の中には雨男とか雨女とかねえ。

菜未 は？

恒吉 いえいえ別に。

美咲 お待たせしました。

菜未 ……あの、

美咲 はい？

菜未 絵変えたんですね。

美咲 ああ、気がつきました？

菜未 同じ人？描いたん。

美咲 いいえ、これはうちに今住んでる従姉妹が描いたんですよ。

菜未 前のは？

美咲 昔弟が。

菜未 そう、同じ人かと思った。変な色つかってて。

美咲 おキライですか？

菜未 好き。

美咲 ？

菜未 私にもこんな風に見える時があるわ。だから覚えててん。

美咲 ゆっくりしていってください。

菜未 ありがとう。

直人登場。松葉杖をついている。

恒吉 ナオちゃん！

直人 ひさしぶり。

美咲 いらっしやい、今度は足？

直人 まあね、こんな感じ。

恒吉 元気？

直人 元気とちゃうから入院しよう。

恒吉 ああ・・・何ゆうてるんやろ私。

直人 ありがとう、花。

恒吉 ああそんなんもう気にせんとして・・・。

振り向かない菜未。

美咲、直人に合図で「きてるよ」と知らせる。

直人 ごめん。

菜未 遅いやんか。

直人 ごめん（なかなか座れない、こけそうになったりする。）

菜未 （手伝おうともせずじっとみている）

美咲、直人を手伝って座らせてやる。

直人 コーヒーな。

美咲 はい。

直人 ちょっと病院遠なったんで。

菜未 そう。

直人 今度のところは普通の病院やから抜けだしにくくて。

菜未 それで？

直人 ああ(封筒を出して)これ。

菜未 (中を見る)

直人 いろいろむずかshなってきたるんや。

菜未 なにが？

直人 僕もう何回もやってるやろ。保険捜査官ゆうのがおつてな、疑われてるみたいなんや。

菜未 へえ。

直人 毎日のように病院にきて調べられてるんや。

菜未 それで？

直人 そろそろ僕ではあかんのとちがうか。

菜未 かわって欲しいって事？

直人 組の方でお金があるんはわかってるけど、後から入った奴もいるし・

菜未 (笑)

直人 ?..?

菜未 あほやねえ。あんたはこれができるから組におらしてもらってるんやんか。病院入るしか脳がないくせに。

直人 ..。

美咲 お待たせ。たてたばかりやからね。(と、コーヒーをおく)

直人 ..。

菜未 (封筒) マークされてるにしては入ってるやん。

直人 そうか。

菜未 私逃げよかおもて。

直人 逃げる？

菜未 もうこんなとこいややねん。どっか行きたいねん。

直人 冗談やろ？  
菜未 なんで。  
直人 だって兄貴が。  
菜未 あの人の女がいるんよ。  
直人 そんな．．．  
菜未 このお金もらっていい？  
直人 え？  
菜未 やり直したいねんはじめっから。誰も私を知らへん街に行つて。  
直人 どこに行くん？  
菜未 決めてへん。  
直人 一人でか？  
菜未 あんたに関係ないやろ。  
直人 ．．．  
菜未 あの人試してるつもりなんよ。  
直人 ？  
菜未 こうやってあんたが入院する度にわざわざ私にお金の受け取り役させて、昔同級生やったっていうだけやないの、なんで私があんたなんかと疑われなあかんの？自分は勝手な事して、人の事はいちいち見張つて。  
直人 ごめん。  
菜未 なんであんたがあやまるんよ！．．．外でね健児が待つてるねん。  
直人 健児？  
菜未 私の見張り役。それもあの人の罠や。  
直人 どういうことかわからへんけど。  
菜未 ええわもう。どうせあんたにはわからへんねんから．．．私行くねん健児と。自分から罠にはまってやるねん。だからこのお金もらっていきよ。  
直人 ．．．  
菜未 ええよね？どうせ又どっかちよっと怪我したらお金もらえるんやろ？あんたはその道のプロなんやから。  
直人 姉さん。  
菜未 そんな呼び方止めてっていつてるやろ！  
直人 ．．．

菜未が叫んだ拍子に彼女のライターがテーブルの下に落ちる。

菜未 拾って。

直人 ……。

菜未 はやく！

直人、拾おうとするが身体が思うように動かない。やっとの思いで拾う。

直人 はい。

菜未、平然とまた落とす。

直人 ……。

菜未 何してんの、拾ってよ！

直人、拾おうとする。菜未立ち上がって拾う。

菜未 (封筒から一枚ぬいて) はらっといて(いこうとする)。

直人 なっちゃん！

菜未 (期待に満ちた顔で振り返る) ……。

直人 ……おまもり大事にしてるから。

菜未 ……(去る)。

電車の音。

じっと見送る直人。

恒吉 ナオちゃんあんた…。

美咲 コーヒーいれなおそか。

直人 二年前の盆踊りの時ばったり会ったんや。はじめは変わっててまさか  
と思たけど向こうから声かけてきて。

美咲 あの人？

直人 みんなのあこがれの子やってん。僕はたまたま家が近所やったからよ  
う遊んでてうらやましがられてた。

美咲 そのこの絵のことほめてくれはったんよ。

直人 誤解されやすい子やねん。高校も途中でやめてしもて・・・盆踊りで  
会った時ほんまにびっくりしたんや。そやけど笑った顔だけは子供の頃  
のまま、ぱーっと花が咲いたみたいでいつも変わってなくて。

恒吉 やくざの嫁さんにおさまってたんやろ。

直人 うん。それで僕も誘われた。

恒吉 あほやわあんだ。

直人 他にしたいこともなかったし、兄貴もかっこよかったしな。そろそろ  
行くわ。今度のとこ抜け出したりしたらうるさいねん。あ、これ（小銭  
を出して）まさちゃんに返しといてジュース代。いつ返せるかわからへ  
んから。

律、少し前から登場している。

直人 あ、りす。

美咲 りす？

直人 ほら、あそこのすごいコーヒー入れる子によろしくな。

美咲 ?あ、おつりおつり。

直人 ・・・あ、うん。

美咲 ナオ、この店ね来月から（言いかける）・・・

直人 この足なあ、治っても右がちよっと短いねんて。

美咲 ・・・。

直人 こんどは頭でもぶつけるしかないかなあ。下手したらこのことも何  
もかも忘れてしまうかもしれへんな。

美咲 やめられへんの？そんなあぶないこと。

直人 他にできることないから・・・。（去る）

見送る美咲と恒吉。

突然美咲にだけ聞こえてくるあの音。

恒吉 あほやわあの子。？美咲？美咲！！

美咲 律、電話でて！

恒吉 電話なんかなくてへんよ。どないしたん？

美咲 ……。

そして美咲はふらふらと厨房へ。酒を飲んでいいるのだ。

恒吉 美咲？！

律、つかつかと寄ってきて美咲から酒瓶をとりあげる。

律 やめとけ。

美咲 うん……。

律 つねきち水。

恒吉 つねよし。

律 はやく！水。

恒吉 人使いの荒い店やわほんま。(といいつつ水をくんでくる) はい。

美咲 ええのに(飲む)。

恒吉 私も酔っぱらいたいわ。

律 勝手に酔っぱらえば。

恒吉 私お酒あかんの、身体にあわなくて。

美咲 恒ちゃん、私海のそばにいるのが辛くなってるん。一人でいると部屋中

が海になつて溺れそうになるねん。

恒吉 酔っぱらってるん？

美咲 ほんまのこと。

律 そろそろ店に帰ったら。

恒吉 指図することないやろ。

先程からポツポツ聞こえていた雨音がいつのまにか大きくなっている。

律 (あ)

恒吉 いやあ降ってきたわほんまに。

美咲 律、ちよつと番してて・・・電話かかってきたら起こして。(二階へ行  
きかけて匡の植物に目を止め) これこの頃枯れてきたなあ。

律 ……。

美咲 まあちやん怒るわ、どないしよう(去る)。

残った二人。

恒吉 あんたあの絵描いたんやって。

律 まあね。

恒吉 けったいな色やねえ。匡の描く絵にそっくり。

律 つねきちもあいつの絵覚えてるんだ。

恒吉 つねよし。

律 へえへえ。

恒吉 一度は惚れた男だもの。

律 は？

恒吉 やめてよ恥ずかしい。

律 はあ。

恒吉 美咲の恋人あれからどないなったん？

律 今月は来てない。

恒吉 そう。

律 あんな優男のどこがいいのかねえ。

恒吉 あんたに女心なんかわからへんわ。

律 女心はわかるけどおかま心はねえ。

恒吉 うるさい。

律 美咲はそろそろやばいな。

恒吉 なにが？

律 高ちやんと目が似てる時々。

恒吉 どういうこと？

律 そういうこと。

恒吉 ……いやな雨。

律 ……。

恒吉 ジョニーは雨が嫌いやったわ。

律 ジョニーか。

恒吉 初恋の人の名前なん。

律 へえっつうことは外人？・・・

恒吉 なんや寂しいわ。

律 ・・・雨はどんな色に見えるんだろ。

恒吉 匡なんかのどこがええん？

律 一度は惚れたんじゃないの。

恒吉 むかししね。けどあの子は女を不幸にするタイプなんよ。

律 私は別に。

恒吉 女ってあかん男にばかり恋をしてしまうんよねえ。

律 だから、

恒吉 わかってるって。

律 ・・・。

その時物音がして、瀕死の状態で匡がふらふらと入って来る。

二人に近づき椅子に腰掛けようとしてそのままボタンと倒れる。

律 匡！

かけよる律。暗転。

## 六場

その夜。静かな波の音。

テーブルにクレパスを広げ眠っている美咲。

いつからそこにいたのか立ったまま彼女をみつめている匡。

美咲 !・・・おかあちゃん？・・・敏也？

匡 俺や。

美咲 ・・・怖い夢みた。

匡 ?

美咲 赤ちゃん抱いて女の人が海岸のところに立ってるねん。すぐ私にはわかった、敏也の奥さん。だからその子は敏也の・・・そう思って見ている

と、女の人はそっとほおずりして赤ちゃんを海に・・・振り返ったらそれが私やねん。

匡 あいつももうこうへんと思うで。

美咲 ……。(黙って飲んでる)

匡 暗いな(電氣をつける)。

美咲 やめてまぶしいやろ！

匡 ……。

美咲 ごめん。

匡 あやまることないよ。夕方になっただけでもすごく暗く感じるってほんまのこと話したん姉ちゃんだけや。雨、すきまから入ってきてるで。

美咲 そのガラス、ちゃんとなおしてないねん結局。

匡 いい加減やな。

美咲 どうせ出ていくんやもん。雨雨雨が降るとカエルがげろげろげろ。

まあちゃん、私が死んだらおかあちゃんと同じ海に捨てて。

匡 ……。

美咲 まあちゃんもへそまがりやからあてにならへんわあ。

匡 なんの話や？

美咲 知ってるんやろ。

匡 なにが。

美咲 武庫川の叔母さんから電話かかってきたよ。あんたに聞かれて困ったって。

匡 おしゃべりばあ。

美咲 海岸でまあちゃんのお母さんに拾ってもらてん私。

匡 そんな話聞きたない。

美咲 こっちおいで。・・・(よろよろと不自由な体勢で近寄ってくる匡の傷に触れて) もう起きても大丈夫なん？

匡 ああ。

美咲 このお店の権利はもともとまあちゃんだけの物やねんからお金は思った通りに使ったらええわ。お父さんの遺言守ってきたけど生きてる人の方が大切やもん。過去は過去、今は今や。

匡 ・・腹減った。

美咲 心配かけて。

匡 ああ。  
美咲 ああとちやうやる。ここも今月いっぱいやねんからちゃんとせな。  
匡 ああ。  
美咲 もう・・・私、伊丹に行くことに決めたから。  
匡 そうか。  
美咲 勝手に伊丹に行ったら、あの人もう私のこと探されへんねえ。  
匡 .....  
美咲 探しに來たりせえへんかなあ。  
匡 姉ちゃん、  
美咲 ん？カレーの残りしかないけど。  
匡 やっぱりええわ。・・・なんやこれ（クレパスを手にとる）  
美咲 律の。懐かしくて。  
匡 .....はいまず全部を混ぜましょう。その中から匡くんが赤だと思  
色を全部選んでみてください。（めちやくちやに選ぶ）ではその次に赤の  
仲間だと思ふものを選んで下さい。んんん？そうかなあ？では残った色  
を似ているもの同士のグループに分けてみましょう・・・ぴっぴっぴっ  
はいっ時間切れ！  
美咲 （黙って匡の頭をなでる）よう通ったね、あそこの病院遠かったのに。  
匡 いっつも姉ちゃんがついてきてくれた。  
美咲 なんでやめてしもたんやる途中で。  
匡 いっつもようならへんし、クレパスやら色紙やらあほらしなうって挫折  
した。ボクシングはじめた頃やったし。  
美咲 目さえ悪なかったら、ボクシングも絵もまあちゃんはなんでもできた  
のになあ。  
匡 目が悪いことなんかなんの理由にもならへん。俺があかんかっただけ  
や。  
美咲 やっぱりあったためたげるわカレー。（いこうと）  
匡 （その手をひっぱって）ここにおってくれ。  
美咲 どないしたん？  
匡 こわいねん。こしかないねん安心できるとこ。ちよつとやそつとの  
金なんかなんの役にもたたへん。・・・こわいねん。  
美咲 .....あんたあの絵どこにやったん？

匡 . . .

美咲 わかってるねんよ、犯人はまあちゃんやろ？前から貼ってあったキリンの絵。

匡 あんなもんいつまで貼っとくねん。

美咲 お父さん大事に大事にしたのに。

匡 . . .

美咲 匡がキリンを黄色に塗ったからこの名前はキリンやって。

匡 あほか。いくらカエルを青に塗ったり、サンタを緑にしたりする息子やからゆうて、キリンを黄色に塗ったんがそんなに嬉しいか。

美咲 嬉しかったんちゃう。

匡 思いきり空は真っ黒に塗ったののに。

美咲 あれは「夜のキリン」やって。

匡 . . . あほか。

美咲 . . . (耳を済ます)。

匡 また聞こえるんか？

美咲 ぶくぶくぶくぶくぶく . . . 海の中にいるみたい。律にねえ、アル中って言われた。あの日に初めてお酒飲んだ、ガラス割られた日。最初はあの音が恐くて恐くて、それから先は反対に聞こえへんともう寂しくてたまらんようになって . . . . この頃ねえ、一回も会ったことのないおかあちゃんにもうちよつとで会えそうな夢みるねんよ。もうちよつとやのに。

匡 姉ちゃん、一緒に海に行こか。

美咲 いやや。

匡 なんで。

美咲 私泳がれへんねんほんまは。

匡 ほしたら一緒に沈んでしまおか、ぶくぶくぶくぶく。

美咲 まあちゃんと？

匡 そう俺と。

美咲 なんで？

匡 約束したから。

美咲 いっ？

匡 あの時海の中で。

美咲 うんってゆうたもんね。

匡 そうや、約束したやろ。

美咲 うん。

匡 行こ。一緒に沈んでしまお。

美咲 ええよ、ぶくぶくぶくぶく。まあちゃんには海はどんな風にみえるん？

匡 日によって違うよ。クレパスなんかにはない不思議な色や。いっつも

みんなと違うサングラスをかけてるようなもんや。

美咲 私がここ出たらあんたどないするん。

匡 姉ちゃんはどこにもいかへんよ。海の底の底の遠いところまでずっと一

緒に沈んでいくんや、そうやろ？

美咲 私もまあちゃんと同じサングラスが欲しい。

匡 俺の世界は青と黄色だけなんや。あとは全部灰色にみえる。

美咲 ……。

匡 けど姉ちゃんだけは違う。緑の森の中におっても海の底に沈んでいっ

ても姉ちゃんだけはみつげられる。そうや赤や。生まれてから一回もみ

たことのない俺だけの赤。そうなんやろ？姉ちゃんがその色なんやろ。

そやから姉ちゃんだけはみつげられるんや

美咲 （手を差し出す）放さんとしてね。

匡 しっかりとつかまるんや。

美咲 さっきまでの苦しさが急に消えていった。まあちゃんの首に腕をまき

つけて身体をびったりとくっつけた。けむくじやらの足に爪先をからま

せる。そう、私はこの時を待ってたんや。もう恐いことなんか何にもな

い。ずっと一緒にどこまでも二人で沈んでいくねん、どこまでも。

匡 抱きしめながら抱かれていた。姉ちゃんの心臓の音が聞こえた、とく

とくとくとくとく、一番優しく愛しい音……いつのまにかあの音と一つ

になった、ぶくぶくぶくぶく。

美咲 もうすぐたどりつける？

匡 うん、もうすぐや。

匡 私のおかあちゃんにまあちゃんのことなんて説明しよ。

匡 同じ場所にホクロのある弟。

美咲 きっと喜んでくれるわ。気持ちいいなあ……。

匡 ああ。

かたく結ばれて海の中に漂う二人。  
暗転。波の音。

### エピソード

高子登場。

手にはたくさんの手紙の束。

高子 声が出ました。あなたとのいざこざ以来、私は誰とも口をきくことすらできなくなっていたのをご存知ですね。今日突然声ができました。そしてその途端にいろんな事いっさいが霧が晴れるように見えてきたのです。この手紙の山はなんでしょう？そうこれはすべて私が書いたものです。私宛のもの、投函してないあなた宛のもの、この二月というものはほとんどここにこもりきりでこうやって手紙を書いていたのでした。あなたは私を愛してなごいかなかった。私の中でとても運命的だったあの出会の時から、一回もあなたは私を愛したことなくなかつた。それなのに私はどうしてこんな風になってしまったのでしょうか。そして今また私はあなたへのお手紙をこうして書いています。決して投函することのないお手紙を。書き終えたらこの手紙の束を抱えて海に行ってみようと思います。何年ぶりでしょう。従弟の匡が描いた灰色の海が忘れられなくてこの土地に帰ってきた筈なのに何故か私は妹に誘われても決して出かけようとはしませんでした。恐かったです。私を呼ぶ声が。何もかも忘れてその声に惹かれてしまいそうな自分が。だから必死でこんなお手紙を書き続け、いつのまにかそれを信じるようになってしまったのです。もしかしたらあなたなんか現実にはいない人なのかもしれないかもしれませんね。でも今ではそんなことたいしたことじゃないんです。海に行きます。そしてすべてのものを沈めてしまいます。

数日後の「きりん」。

ぼんやり絵を描いている彼女なりの喪服姿の律。

敏也、登場。

律 オス。  
敏也 ……  
律 二階の奥、仏壇。今誰も来てないから。  
敏也 本当なんだね、やっぱり。  
律 ……本当だよ。冗談かと思った？  
敏也 ……テレビのニュースで見て。  
律 そう。  
敏也 最初はピンとこなかった。  
律 だろうね。  
敏也 どうして…？  
律 さあ。  
敏也 きみは？  
律 他に番する人もいないからとりあえず。うちの両親もきてはいるんだ  
敏也 けど。子供順調？  
律 子供？  
敏也 生まれるんだろ？  
律 俺は…  
敏也 ……一緒に墓に入れてやれなかったな。  
律 ……  
敏也 ずっと前に立ち聞きしたんだ。わるい。  
律 旅行ひとついけなかった。  
敏也 行く気なんかなかったんだろ、はじめっから。  
敏也 ……  
律 大丈夫だよ。美咲は化けてでたりしないよ、本人恐がりだったし。参  
るなら早く参れば？誰かくるとうるさいぞ。  
敏也 (行こうとして) お姉さん、高子さんは？  
律 入院中。海に飛び込んだのは高ちゃんの方が早かったんだけどね、そ  
の時は匡が助け出した。あいつ人一倍水泳得意だったんだけどな。  
敏也 ……  
律 山には山の神様がいて遭難した人を引き寄せちゃうっていうけど、海  
にもそういう神様がいると思う？  
敏也 さあ。

律　ことわざ博士いなくなっちゃったからね、ほらカエルだのさんしょだの。

敏也　．．．。

律　でもきつと二人一緒だから寂しくないね。あ、嫉妬する？

敏也　．．．いや。

敏也二階へ。お参りするリンの音。

律、立ち上がって植物を手に取り、はあーっと息を吹きかける。

律　お前だけは丈夫な奴だ。持ち直したもんな。

振り返ると黒い服を来た菜未が立っている。

律　お参りですか？

菜未　いえ、あ．．．ここも不幸があったんですね。

律　ここも？

菜未　私もお葬式の帰りです。

律　ああ。

菜未　もしあいてたらここでちょっと休めかなと思って。

律　ああ、すいません．．．（なかなか菜未が去らないので）あ、どうぞ。

お茶ぐらいいますけど。

菜未　そこ座ってもいい？

律　ああどうぞ。

菜未　もしかしてあの絵描いた人？（指差す）

律　はあまあ。

菜未　やっぱり．．．ここでいつも待ち合わせしてたんです。

律　はあ。

菜未　その人事故で死んでもて、死んでもたらなんや言いそびれた事いっぱいあるような気がして、ここに来たら又会えるような気がして．．．ごめんなさい。

律　あ、どうぞ気の済むまで座っていいですから。  
菜未　ありがとう。

敏也 (顔だけだして) マッチある? 火が消えちゃったんだけど。

律 マッチ?(とあちこち探す。菜未をぼんやりみている敏也に気付き) 持っていくから上で待ってて。

敏也去る。律、なかなか開かない引き出しをこじあけたりするうちに、たんの後ろに隠されている絵に気付く。

埃をかぶった額におさめられたキリンの絵。しばしみつめる律。

菜未 あそれ、前にここに飾ってあった絵やわ。

律 子供とは思えん色遣い……。

菜未 夜やったんかなあ。

律 え?(と、自分の描いた「灰色の海」の絵を取り外しきりんの絵を飾る)

菜未 真っ暗。

律 夜のキリンか……。

菜未 夜にキリンは何してるんやろ?

律 寝てるでしょそりや。

菜未 目閉じて?

律 んんたぶん。

菜未 立ったままよね。

律 当然。

菜未 夢は見るかな?

律 たぶん。

菜未 色付き?

律 さあどうでしょう。

菜未 あの人も見てたんやろか、夢。

律 ……そう、私がみつけた時、高ちゃんは白い紙の束を海に浮かべてこつちを向いて笑ってた。匡が高ちゃんを抱いて手を振った。その時大きな波がきて二人がそのままさらわれて……。いや違う。私が二人を見つけた時、見たことのない赤い服を着た美咲をあいつがしっかり抱いていた。美咲は小さな赤ん坊を抱くように優しくあいつの身体に手をまわしていた。二人はまるでつながったまま生まれてきた双子みたいに見える

た。それから・・・

菜未 何の音？

律 え（我にかえる）

菜未 ほら聞こえる、ぶくぶくぶくぶく。

律 ぶくぶくぶくぶく（耳を澄ます）。

菜未 律、電話出て！

律 え？

硬直する律。

振り返るとそこには誰もいない。

ふと、海に目をやりなんとなく微笑む。

静かに暗転。

幕